



天皇の母となった倉吉の女性

大江磐代君

お お え い わ し ろ ぎ み



▲菊浮線綾文蒔絵煙草盆
(閑院宮家紋章入 大聖寺蔵)

大江磐代君顕彰展

大江磐代君の書状や、黒漆桜蒔絵硯箱や菊浮線綾文蒔絵煙草盆など、光格天皇、閑院宮家ゆかりの品などを展示します。

会 期

10月13日(土)～11月4日(日)

午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

※休館日：10月15日(月)、22日(月)、29日(月)

会 場

倉吉博物館

(☎22-4409 / ☎22-4415)

入場料

一般 500円(300円)

大学・高校生 200円(100円)

70歳以上 300円

※()は前売・20人以上の団体料金

※中学生以下、障害者手帳などを持っている人とその介助者(1人)は無料

講演会

「光格天皇とその時代」

と き：10月21日(日)

午後1時30分～

ところ：倉吉交流プラザ 視聴覚ホール

講 師：藤田 寛さん(東京大学名誉教授)

※参加費・事前申込不要

ゆかりの地めぐり

「大江磐代君 ゆかりの地を訪ねて」

と き：10月14日(日)、20日(土)、

27日(土)、11月3日(土・祝)

午前10時～11時30分

集合場所：倉吉博物館

内 容：博物館→大江神社→生誕地→

大岳院(※大岳院で解散)

江戸時代、延享元年(1744年)、倉吉の田町(現在の湊町)で、一人の女の子が生まれました。彼女の名前は、「つる(鶴)」。「つる」は、山陰のこの小さな田舎町に生まれながら、いくつもの数奇な運命を辿り、ついには郷里から遠く離れた京都で、朝廷のトップである天皇の母に上り詰めた女性です。そのときの彼女の名は、「大江磐代」(1744-1812年)。

当時、磐代は、身分が低いなどの理由で天皇の母としての存在を隠されてきました。ですから、彼女の生き様を伝えるものもあまり残っていません。けれども、わずかに残っている彼女の書状や伝承からは、父母へのあつい孝心や、分別をわきまえながらも、芯が強く、勉強熱心で努力家な女性であったことがうかがえます。

そして、第1子、後の光格天皇をはじめとする彼女の息子や子孫たちは、その資質や精神をしっかりと受け継ぎ、後の「明治維新」という日本史の大転換期において、国のかじ取りに大きな影響力を及ぼしたとされています。

昨年、その光格天皇の直系である天皇陛下と皇后さまが、倉吉において没後200年にあたります。これらを機に、今回、倉吉博物館で「大江磐代君顕彰展」が開催されます。郷土の偉人「大江磐代君」に迫ります。





▲倉吉博物館を視察された、
天皇、皇后両陛下
(平成23年10月31日(月))

郷里の倉吉

「つる」の父親は、岩室常右衛門
といい、鳥取藩池田家の家老で、
倉吉を統治していた荒尾家に仕
える侍でした。母の名前は「りん」。
父・常右衛門は、「つる」が生
まれる前に荒尾家を辞して浪人
となり、医師を志して京に上っ
たと伝わっています。

そのため、残された母「りん」
は女手一つで「つる」を産み、9
歳まで養育したのです。

「りん」の家柄・身分など詳し
いことはわかっていません。一
説には、田町で焼き餅を売って



▲大江磐代君
生誕の碑
(倉吉市湊町)

生計を立てていたと言われてい
ます。

「つる」が9歳になった宝暦2
年(1752年)、名を「宗賢」と
改めた父が倉吉に帰ってきま
す。しかし、それは、妻子と倉
吉で暮すためではなく、今度は
「つる」だけを連れて再び上京し
てしまいます。

母親、そして妻である「りん」
がなぜ同道しなかったのか、
自らの意志なのか、あるいはそ
れ以外に何か理由があったのか
を解き明かす資料は残っていま
せん。しかし、いずれにしても、
身分制度が厳しかった当時、「り
ん」の身分が低かったことが根

底にあったのだろうかと言われて
います。

「つる」は、わずか9歳で、母
親とも、郷里とも離れて、京都
に旅立ちます。そして、生涯2
度と倉吉の土を踏むことも、母
親と相見えることもありませ
んでした。

けれども、後年、閑院宮家に
仕え、「磐代」と呼ばれ、天皇の
母となっても、故郷に残した母
や、同じ京都にいながらうこ
ともままならない父親に対する
孝心は薄らぐことがありませ
んでした。2人に対して、なに
くれとなく心を配った手紙を送
り続けています。

京の都

京に移り住んだ「つる」は、し
ばらくして、名を「とめ」に変え
ます。そして、上流階級の子女
にも引けを取らないよう父・宗
賢の知人から、礼儀作法や教養
全般の教えを受けています。

生来、資質に富み、努力家
でもあった「とめ」は、勉強やけい
こに励み、修養を積んでいった
と思われています。

こんな逸話が残っています。
上京して間もなく、「とめ」は、
「小田右衛門」という人の養子にな
りますが、3年ほどで不縁に
なっています。小田が語るそ
の理由は、「自分の子としては
分に過ぎる(もつたいない)」と
いうものだったといわれています。
それほどに、「とめ」は輝く
存在になっていたのでしょうか。

そのような「とめ」は、上京7
年後の宝暦9年(1759年)、
元は宮中の最高女官であった即
心院・藤原保子に仕えるようにな
ります。

その働きぶりが、即心院のも
とをよく訪れていた閑院宮妃
宮成子内親王(中御門天皇の皇
女)の目にとまります。

大江磐代の関係年表

延享 元年 (1744)		誕生。幼名「つる」 父：岩室宗賢(常右衛門) 母：りん
宝暦 2年 (1752)	9歳	父に連れられて京都に上る
3年 (1753)	10歳	小田右衛門の養子となる
6年 (1756)	13歳	小田右衛門と不縁になる
9年 (1759)	16歳	即心院(長橋局藤原保子)に仕える
明和 2年 (1765)	22歳	即心院死去
3年 (1766)	23歳	籌宮成子内親王の侍女となり、閑院宮家に入る
明和 8年 (1771)	28歳	籌宮成子内親王死去(5月) 祐宮兼仁親王(後の光格天皇)誕生(8月)
明和 9年 (1772)	29歳	寛宮盈仁親王誕生
安永 3年 (1774)	31歳	精宮誕生
5年 (1776)	33歳	鏗宮誕生
7年 (1778)	35歳	健宮誕生
8年 (1779)	36歳	後桃園天皇崩御。光格天皇即位
天明 3年 (1783)	40歳	母・りん死去
寛政 4年 (1792)	49歳	父・宗賢死去
6年 (1794)	51歳	閑院宮典仁親王死去 仏門に入る。法号 蓮上院
文化 9年 (1812)	69歳	閑院宮から聖護院門前に引っ越す 死去(12月9日)

宮家へ

即心院の死後、明和3年(1766年)、「とめ」は、籌宮に乞われて侍女として宮家に仕えるようになります。

しかし、籌宮は、間もなく体調を崩してしまいます。それと前後して、「とめ」は、籌宮の夫である閑院宮典仁親王の側室となつていきます。乳幼児の死亡率が高かった当時、公家や武家では、正妻以外に側室を置いて、子どもを多くもうけ、家系を守っていたのです。

「とめ」が仕えるようになって5年後の明和8年(1771年)5月、籌宮は亡くなります。

その3か月後の8月15日、「とめ」は、男子を出産します。後の光格天皇となる祐宮兼仁親王の誕生です。

そして、翌年の明和9年(1772年)には、第2子となる

寛宮盈仁親王、安永3年(174年)には第3子精宮(天折)、安永5年(1776年)には鑑宮(天折)、そして安永7年には第5子健宮(天折)と、5人の王子をもうけ、名も「大江磐代」と呼ばれるようになりました。

天皇の母に

安永8年(1779年)、磐代にとつて、さらに思いがけない出来事が起こります。この年の秋、まだ若く、皇位を継承できる子どももいなかった後桃園天皇の病気が重くなり、急遽、世継ぎ問題が持ち上がったのです。そして、朝廷は、磐代の息子祐宮(9歳)に皇位を継承させることを決めたのです。

安永9年12月、祐宮の天皇即位の大礼が挙行され、ここに第119代光格天皇が誕生します。光格天皇は、この後、文化14年(1817年)まで、39年余にわ

たり皇位に就き、その子・仁孝天皇に譲位して後も上皇として朝廷のかじ取りをしました。寛宮盈仁親王は、天明2年(1782年)、聖護院に門跡として得度しています。

磐代は、寛政6年(1794年)9月2日、典仁親王が亡くなると出家し、「蓮上院」と名乗ります。聖護院門跡盈仁法親王の計らいで聖護院近くの屋敷で静かに余生を送ります。

文化9年(1812年)12月9日、大江磐代は、波乱の人生を閉じます。享年69歳でした。亡骸は廬山寺(京都市)に葬られ、今も静かに眠っています。

郷土の誇りに

明治以降、磐代の存在は世に明らかになり、伝記が刊行され、生誕碑や神社の建立も行われました。多くの市民から敬愛される郷土の偉人となっております。



①



②



③



④

- ▲①閑院宮邸跡(京都市)
- ②聖護院門跡(京都市)
- ③大江磐代君の墓(京都市・廬山寺)
- ④大江神社(打吹公園内)



湊町で生きる「磐代さん」のつながり

湊町自治公民館長 倉恒 俊一さん



湊町は、大江磐代君がお生まれになった場所です。私も、小さいころから「磐代さん」と呼んで親しんできました。10年ほど前から、4月中旬に、「磐代さん」の生誕碑の前でお茶会を催しています。地域の高齢化が進む中で、一人暮らしの高齢者をはじめ、子どもも若者もみんなが集まる、よい機会となっています。今ではお茶会は「春まつり」となり、「夏まつり」や、「秋まつり」も生誕碑の前でにぎやかに開催しています。今年の「春まつり」では、「磐代さん」の母・りんさんが、「田町の焼き餅屋のおりんさん」と呼ばれていたという伝承にちなんで、焼き餅の屋台を出し、非常に好評でした。「磐代さん」は、孝行心のあつい、努力家だったと思います。慎ましやかな、品のある女性だったことがさまざまな文献からも分かり、湊町の誇りです。

博物館長が顕彰展のみどころを解説

書状から読み解く磐代の心

磐代の人生は、とてもドラマチックです。

けれども、磐代は、決して母にも親族にも身辺に起こった出来事を伝えていません。語ってはいけない、漏らしてはいけない「恐れ多いこと」であると考えていたふしがあります。

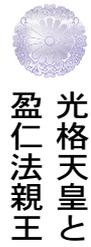
祐宮が踐祚した1か月後に母へ宛てた書状では、さすがに、

「細々と話したいことがあるが、人目があるので差し控える」と、話したい心情を吐露しながらも口をつぐんでいます。「細々」の中身は、祐宮の踐祚という慶事だけでなく、2人の幼い王子を亡くしていることも含まれていたのでしよう。母にさえ告げられない磐代の悲しみの大きさは察して余りあるものがあります。

「細々と話したいことがあるが、人目があるので差し控える」と、話したい心情を吐露しながらも口をつぐんでいます。「細々」の中身は、祐宮の踐祚という慶事だけでなく、2人の幼い王子を亡くしていることも含まれていたのでしよう。母にさえ告げられない磐代の悲しみの大きさは察して余りあるものがあります。



受け継がれる心



光格天皇と
盈仁法親王

後の光格天皇となる祐宮は、本来、天皇家を継ぐことのない宮家の生まれでした。父・閑院宮典仁親王は、東山天皇の孫でしたが、閑院宮は4つの宮家（伏見宮、「桂宮」、「有栖川宮」、「閑院宮」）の中で最も歴史が浅く、また、祐宮は典仁親王にとつて6番目の王子であったため、皇位は遠く、将来は、出家して聖護院の門跡を継ぐ予定の身上でした。

しかし、後桃園天皇は、皇嗣を決めないうちに急逝し、祐宮の兄たちはすでに門跡として仏門に入っていたため、第6王子の祐宮が天皇家を継ぐことになったのです。

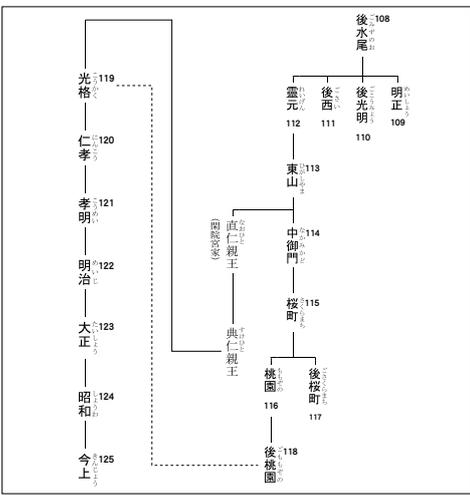
「本来、なるはずのない天皇——自他ともにそういう思いがあつたのかもしれない。最初、公家たちからは、「天皇家の血筋から遠い」という理由で軽んじられたといえます。」

しかし、光格天皇自身は、「本来、なるはずのない天皇」だからこそ、立派な天皇であろうと努めています。学問に励み、当時は、江戸幕府に握られていた政治的権威を朝廷に取り戻そうと、古代・中世の天皇家や朝廷について熱心に研究し、朝廷の儀式や神事の再興・復古に精力的に取り組んでいます。現在、天皇家がその年の収穫に感謝するために執り行っている「新嘗祭」も、光格天皇が再興したものです。

また天明8年に、御所は火災で焼失します。財政難であつた江戸幕府は、質素な形で再建しようとしていますが、光格天皇を中心とする朝廷は、平安時代の内裏と同じ様式で再建するよう幕府に要求します。そして、数々の折衝を経て、朝廷側の主張が通り、寛政3年(1791)年、復古的な御所が完成しています。

光格天皇の「朝廷の権威回復」の志と、天皇家こそ日本国の君主であるという思想は、以後天皇家や朝廷で受け継がれていきます。孫の孝明天皇は、ペリー来航を機に民間にも広がった「尊皇攘夷」思想の象徴的な存在となり、倒幕運動へとつながっていきます。そしてひ孫の明治天皇の践祚と同じ年に「王政復古の大号令」が発せられ、「明治維新」の大業として実を結ぶのです。

◀天皇系図 (宮内庁ホームページより)



◀ 光格天皇像(泉涌寺蔵)



◀ 盈仁法親王像(聖護院蔵)

また、母に宛てた手紙では、必ず、父と自分の無事を伝えていきます。幼少期、母に育ててもらったことへの感謝の念も決して忘れず、金子や日用品を送り、少しでも生活が楽になるよう気遣っています。

「宮家の中で結構な暮らしをしているものの、行動の自由はほとんどなく、京にいる父にさえ自分とは身分が違い会う機会も遣つてます。」

「母への恩返しをしようとするその姿からは、磐代のあつい孝行心が伝わってきます。」

歴史から読み解く磐代の子らの心

磐代の孝行心は、実子である光格天皇や盈仁法親王にも引き継がれたのではないのでしょうか。

光格天皇が、父・典仁親王に太上天皇の尊号を贈ろうと画策して、幕府と対立した尊号事件は有名です。

この光格天皇の行動も、実父に対する孝行心から出たもので、実母磐代の資質を受け継いだものといえるのではないのでしょうか。

また、「聖護院御日録」の記事



倉吉博物館 根鈴 輝雄館長

「また、盧山寺には、光格天皇が、「生きていくうちは、母に孝行することもままならなかった。せめて死後は、母のそばで眠り、その魂を安らかしめたい」と、自分の位牌を磐代のそばに置くよう、遺言したと伝わっています。今も、磐代と光格天皇の位牌は、盧山寺で一緒にまつられています。」